

保育者を目指す学生の障害観に関する研究（3） —障害のある子どもの保育についての考えとその変化—

Study on How the Disabilities are Considered by the Students,
Early Childhood Care and Education (3)

: Changes in Their Way of Considering the Child-care for the Children with Disabilities

権 明愛
Ming-ai QUAN
潮谷 恵美
Emi SHIOTANI

鈴木 晴子
Haruko SUZUKI
山田 陽子
Youko YAMADA

要旨

本研究は、保育者養成課程における障害のある子どもの支援に関するカリキュラムの充実を図ることを目的とし、保育者を目指す学生の障害のある子どもの保育についての考え方を把握するためのインタビュー調査である。保育所・幼稚園における障害のある子どもを受け容れることに対する子どもにとっての意味として、どちらの子どもにも意味があると回答した。障害のある子どもと障害のない子どもが共に育つことの意義を見出し、この考えの変化には保育者養成カリキュラムの影響を受けている可能性が示唆された。保育者養成課程を経る中で、障害のある子どもへの保育についての考えは変化し、実際に適切な保育環境において障害のある子どもを受け容れることには肯定的な考えであった。ただし、保育・教育の場を超えて制度・施策を含む障害のある子どもを取り巻く大きな社会的な環境についての意識が足りないという課題も見えてきた。

1. はじめに

2014年、日本は障害者権利条約に批准した。この批准にかかわり、文部科学省では「共生社会をめざしたインクルーシブ教育システムの構築にむけた特別支援教育を推進」、厚生労働省においても「今後の障害児支援のあり方について」が検討され、いずれも障害のある子どもの「インクルージョン」を実現するための教育や支援の施策を提示している（文部科学省，2012；厚生労働省，2014）。さらに、2015年4月の子ども・子育て支援新制度施行により、すべての子どもを対象とする施策における障害の

ある子どもへの対応と一般施策をバックアップする後方支援として障害のある子どもを対象とする専門的な支援施策を位置づけ、保育所等の育ちの場における障害のある子どもの支援に協力できるような態勢づくりが必要であると提示されている（厚生労働省，2014）。子どもの多様なニーズに応じインクルージョンの概念に基づくインクルーシブ保育の在り方についてすべての子どもを排除しない、一人ひとり異なるニーズに応じた保育の実現が目指されているといえよう。その上で、日本における文化的・社会的・経済的困難な特別なニーズを持つ子どもに対応しうる保育者の養成は大きな課題といえよう。

このような状況において、円滑に障害のある子どもの支援が行われるためには保育現場における保育者の役割がますます大きくなり、重要な担い手として期待されるのは必至である。保育者により一層障害のある子どもの支援に関する専門性が求められることになるが、その役割を果たすためには保育者養成段階において障害のある子どもの支援に関するカリキュラムの充実が必要となる。

著者らは、保育者養成課程における障害のある子どもの支援に関するカリキュラムの充実を図るためまず学生の基本状況を把握することを目的として、2012年から継続的に研究をしてきた。筆者らの行った学生の障害のある子どもとの出会いについての実態調査の結果によると、回答者の約8割が大学入学前に障害のある子どもと出会い、一緒に過ごした経験があることがわかった。同時に、障害のある子どもとの出会いは学校生活及び学校生活以外で生じていることもわかった（鈴木ら，2013；鈴木ら，2014）。また、大学1年生での障害のある子どもの保育に対する思いや考えの傾向として、「環境」「保育上の留意点」「保育における障害の認識」「差別・偏見」「将来的展望」の5つの視点に着目していることがわかった（鈴木ら，2014）。さらに、筆者ら（2015）において、大学3年生になった学生の障害のある子どもにとってふさわしい保育形態に対する大学1，2年次での考えの変化を検討した。その結果、障害のある子どもにとってふさわしい保育形態として、子どもの発達に応じたかかわりと環境の工夫、子ども同士の関係、保育環境の人的環境の役割について考察するようになり、障害のある子どもとない子どもが共に育つことの意義を見出すようになっていくことが窺えた。また、大学1，2年次での考えの変化については7名中6名が変化していると述べ、保育者養成課程に在籍する中で変化していくことが確認された。

上記の研究成果をふまえ、本稿では、保育者をめざす学生の障害のある子どもの保育の考えとその変化について検証することとする。

2. 研究の方法

(1) 調査対象者

本研究では、2013年度に実施したアンケート調査の研究対象で、追跡研究に協力の了承を得た保育者養成課程に在籍する3年生8名のうち、本インタビュー調査への研究協力の了承が得られた7名を対象とした。

(2) 調査方法

2014年7月に1名当たり約30分程度の時間をかけてインタビュー調査を実施した。なお、インタビューはインタビューガイドに沿って実施し、その回答をICレコーダーに音声録音し、逐語を起こした。インタビューアーは障害のある子どもについて学び、現場経験があり、またインタビューに慣れている方に依頼した。

(3) 調査項目

インタビュー項目は以下の3項目である。項目Ⅰ：大学入学後の障害のある子ども及び大人との出会い、項目Ⅲ：障害観の変容については、半構造化面接で実施し、項目Ⅱ：障害のある子どもの保育・教育に関する意識の変容については、2013年度に実施した質問紙項目を用いて“現在のあなたの考え”を問い、考えの変化とそのきっかけについては半構造化面接で実施した。

本稿では、項目Ⅱの②保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れる(統合保育)場合、誰にとって意味があると思うか。その考えは1, 2年次と変わったか。③障害のある子どもの保育についての考え方の2つの質問の回答について分析を行うこととする。

(4) 分析方法

インタビュー項目のうち、選択肢のある項目については単純集計で分析し、設問に対して自由回答の項目については質的分析を行った。質的分析にあたり、項目Ⅱ②保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れる(統合保育)場合、誰にとって意味があると思うかとその考えは1, 2年次と変わったかについては、回答傾向の分類を試みた。また、項目Ⅱ③障害のある子どもの保育についての考え方については、以下表1に示した障害のある子どもの保育に対する思いや考えのコード化(鈴木ら, 2014)を基に分析した。

表1. 障害のある子どもの保育に対する思いや考えのコード化(鈴木ら, 2014)

障害のある子どもの保育に対する考え方の分類とその内容		コード化
○環境 ・社会生活 ・保育・教育	障害の有無にかかわらず共に生活しやすい社会 障害の有無にかかわらず共に過ごす場 障害程度を考慮した保育・教育の場	環境-1-1 環境-2-1 環境-2-2
○保育上の留意点 ・子ども支援 ・保護者支援	子どもにとって必要なかわりの提供 保護者に対する助言・指導	保育上の留意点-1-1 保育上の留意点-2-1
○保育における障害の認識 ・個性 ・ニーズがある	障害を個性とする 支援は要するが、障害と意識しない	障害の認識-1-1 障害の認識-2-1
○差別・偏見 ・差別偏見がある ・差別偏見の排除	差別偏見があるという認識 差別偏見を取り除くことが望ましいという認識	差別・偏見-1-1 差別・偏見-2-1
○将来的展望	今後のかわりに向けた心構え	将来的展望-1-1

(5) 倫理的配慮

調査のすべての過程において研究対象者の人権およびプライバシーの保護に配慮しており、学内の研究倫理委員会の承認を得た。本論文においても調査対象者の名前が特定できないように配慮をした。

3. 結果

(1) 保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れることに対する子どもにとっての意味について

研究対象者7名に対し、保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れる場合、障害のある子どもとない子どもの誰にとって意味があるかについて、「1. 障害のある子どもにとって意味がある」「2. 障

害のない子どもにとって意味がある」「3. 障害のある子どもと障害のない子ども両方の子どもにとって意味がある」「4. 障害のある子どもと障害のない子ども両方の子どもにとって意味がない」「5. 分からない」の5つの選択肢を与えた上で回答を求めた。その結果、7名中7名が「3. 障害のある子どもと障害のない子ども、両方の子どもにとって意味がある」という回答だった(表2)。

上記の回答理由として、障害のある子どもと障害のない子どもそれぞれの立場に立ってのメリットを述べるものが多かった。学生Aは「障害のない子どもは障害のある子どものことを障害があると捉えないのではないか。同じ子どもとして一緒に過ごすことが大切」と述べており、障害のない子どもにとっての意味のみを述べているものもあった。

本質問に対する障害のある子どもにとって、障害のない子どもとかかわる意味に言及した回答としては、遊びの充実や楽しい経験を一緒にする事、将来を見据えた生活において障害のない人との接点をとることを必要とすることを想定する視点から共に過ごす意味があると述べるものがあった。また、「障害のある子どもに良い影響があるかもしれない」と述べるにとどまるものがあり、具体的に何についてよい影響が起るのかは述べられておらず、今回の回答内容では追跡することができないものもあった。次に、障害のない子どもにとって、障害のある子どもとかかわる意味は、「障害のない子どもにとっても障害のある子どもができないことなどを思いやって手助けするようになる。そういった気持ち

表2. 保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れることに対する子どもにとっての意味

学生	回答	回答の選択理由	1, 2年次との考えの変化
A	3	一緒に生活していく上で、障害のある子どもを障害のない子どもが助けたり、障害のない子が障害のある子を、多分、障害があると思っかかわる子はそんなにいない気がするので、同じ子どもとして一緒に過ごすのが大切だと思う。	変わっていない。
B	3	障害のある子どもにとっても、ない子どもにとっても、障害のない子が、ある子に対して接し方を学ぶ機会にもなる。ない子にとっては、友達がいっぱいできるかな。障害のある子どもが集る施設はいっぱいありますが、そういうところよりも、保育園とか幼稚園の方が子どもがいっぱいいるし、色々な遊びなどもできるし、先生もいっぱいいる。そういう環境で遊ぶことは、すごく大事な経験で、楽しいというのがすごく感じられると思う。子どもの頃は、そういう楽しいと思ふ経験はいっぱいあったほうがいいのかと思う。	変わっていない。
C	3	授業の中で、統合保育についてちょっと触れた機会があった。その時に、障害のない子どもが障害のある子どもとかかわった時に、相手の気持ちになって考える機会が増えると感じた。また、障害者の専門的機関の中でかかわる人達と、障害が全くない統合保育での環境が違って、障害のない人と障害のある人のかかわり方が、障害を持っている子どもにとって、社会に出た時に大切だと思う。それで両方にとって意味があると思う。	いろいろ途中でわからなくなったりとかしたが、あまり変わっていないと思う。
D	3	実際に見たことはないが、授業のなかの事例を読んだり、ビデオ視聴する中で、障害のある子どもが障害のない子どもと一緒に過ごしているところを見て、一緒に外遊びをしたりプールに入ったり、援助もあるなかで、そういう同じ動きをしていくなかで、自分でできたという本当に楽しそうなことが表情から伝わってきた。障害のない子どもも、一緒に助け合って生活するとか、一緒に楽しむこと……。何だろう。障害があるからかわいそうとかいうのではなくて、一緒に楽しむというほうに向かっていたと思った。	はい。
E	3	障害のある子にとっても、同年代の子たちとかかわることでも何かしらいい影響があるかもしれない。障害のない子どもにとっても、障害のある子どもができないことなどを、思いやって手助けしたりする。そういう気持ちが育まれると思う。	変わった。
F	3	障害のある子どもも、障害のない子どもと接する機会があるほうが良いと思う。また、障害のない子どもも、大きくなってからいきなり障害のある人とかわるのとはやっぱり、いろいろ偏見などを持ってしまったり難しいこともあると思うので、小さい時から自然にかかわるほうが良いと思う。	あまり変わっていない。
G	3	集団の中で生活するというのは、障害のある子どもにとって、これから生活していくなかで必要なこと。自分以外の人が出て、人の存在に気づけたりすると思うので、障害のある子どもの成長にとっても意味があると思う。 また、障害のない子どもにとっても、障害のある子どもが近くにいるということは、子どもなりにすごく考えさせられることだと思う。障害のある子どもと暮らすことで、その子に優しくできたり、どうしたらこの子がみんなとやれるかを子どもなりに考えて、言葉にしているのを聞いたことがあり、すごくいい影響があると思った。	1～2年生のときも、同じ回答だったと思う。そのときより、自分のなかで、障害児の勉強をしてきたことで、言葉にしゃすくなりました。

が育まれる。」や相手の気持ちになって考える機会の増加、障害のない子どもが障害のある子どもへの接し方を学べること、障害のある子どもと障害のない子どもが共に育つ環境づくりに向けた幼少期のかかわりの重要性に注目する考えがあった。

これらの結果から、保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れることの意味として、障害のある子どもと障害のない子どもの双方に共に過ごす意味があると捉える傾向にあることが窺えた。この考えは、1、2年次と大学3年次で変化があるのかを問うたところ7名のうち学生A、B、C、Fの4名が「変わっていない」、学生D、Eの2名が「変わった」と回答しており、後の1名学生Gは「イメージがしやすくなり、言葉にしやすくなった」と回答した（表2）。

保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れる場合の意味合いに関する考えが1、2年次と大学3年次で変わっていない学生と変わった学生がいるが、具体的内容を述べていない学生が多いため、詳細な分析は次の研究に譲ることとする。

（2）大学3年次の障害のある子どもの保育についての考え方

大学3年次の障害のある子どもの保育についての考えを聞くにあたり、「あなたの今の障害のある子どもの保育についての考えを教えてください。あなたの考えを自由に述べてください」と問うた。その結果を以下表3に記す。すべての子どもが共に保育・教育環境で過ごすことについて、そうしたいという思いと同時に、そうすることの難しさにも目を向けるようになってきていることが窺えた。

表3. 障害のある子どもの保育についての考え方

学生	回答内容
A	その子の持っている障害の度が軽いというか、普通の幼稚園や保育園で、障害を持っていない子どもと過ごせるレベルの障害であれば、一緒に過ごしたほうがいいと思う。その子の得意な部分を出して、それをほかの子どもに教えられるような場所などがあつたらいいと思う。
B	受け入れる段階でなるべく受け入れたいと思う。しかし、3年生になっている授業を受けているうちに、受け入れたくても自分達の園とか態勢などがきちんと整っていないと、受け入れられないと思う。逆に態勢がきちんとできていない中で、受け入れたいという気持ちだけで受け入れてしまうと、その子にとっても周りにとっても良くない上、逆に嫌な思いをさせてしまうだろう。こういったことから断ることも大事なのかと最近思うようになった。難しいが、この間、重度の子どもを受け入れるか、否かを考える授業があり、正直、受け入れ難いと思った。あまりにも重たすぎると、こっちも、その子とどう接しながら保育していかかわからない。他の子も見なければいけない。では加配保育者を1名あてることも、できる園とできない園があると思うため、難しいと最近思う。2年生までは、全部受け入れると思っていたが、3年生になって、いろいろそういうところも考えるようになり、受け入れるか受け入れないかをしないとけないんだなと思った。だから今は、ちょっと難しいと考えている。
C	障害を抱えている子どもには、より一層の注意と配慮が必要である。もし統合保育を行っている園の職員であったら、職員の配置の仕方にもよるが、難しさや大変さの気持ちのほうが多分今は大きいと思う。しかし、統合保育の大切さなども考えたり、そうだなと思う部分があるため、自分の中で矛盾がある。そういう子どもとかかわる園がたくさん増えてほしいというの、実際自分の中の思いでもあるため、難しいと思っている。
D	障害のある子どもに関しては、(やっぱりさっきも言ったように)統合保育、なるべく狭い空間にいるのではなくて、広い視野で、健常児も一緒に遊んだり、できる限り、その子の状態も見て、外に出たり、一緒に遠足に行ったりとか、行事にも参加、運動会にも出たりとかして、一緒に思い出を作っていくことが、内側から育つものがあると思う。
E	もし自分が保育者になって、クラスで障害のある子がいたときに、すごい不安がある。その子ばかりに目が行ってしまわないとか、クラス全体を見ながら……。障害という勉強は、サブじゃないですけど、今はそんな感じで勉強している。専門分野ではないというか。そのため、自分が仕事をしたときにすごい不安があるというのを考えたことがある。たぶんいい面とかもたくさんあると思うが、保育者の立場になると、どうしていいかわからなくなったりすると思う。
F	今は障害のある子どもとかかわる機会はまだまだ少ないと思うので、もっと自然に障害のある子どもとかかわれるような環境ができた、保育園にももっと普段から障害のある人とかわれるような環境ができたらいいいと思う。
G	やっぱり障害という壁をなくそうというのではなくて、保育のなかで子ども同士が、障害のある子どももいない子どもも、お互いのことを考えられるのがすごくいいと思う。障害のある子どもが教室に入れないうちに、どうしようか考えていると、子どもたちから、「じゃあみんなで外に行こうよ」という声が出たのを聞いたときに、すごくいいと思った。自分もそういう保育がしたいと思った。 やっぱり障害のある子どもたちが成長していくなかで、住みやすい世の中を考えられる人。保育士とかそういう人たちがやっぱり考えていべきだと思うので、もっと勉強しないといけないと思う。

4. 考察

(1) 保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れることに対する子どもにとっての意味について

保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れることに対する子どもにとっての意味として、回答者7名全員が「3. 障害のある子どもと障害のない子ども、両方の子どもにとって意味がある」と回答した。保育・教育機関でともに過ごす際の影響を述べるものもあれば、幼少期に障害のある子どもとない子どもがともに過ごすことによる将来への影響を述べるものもあり、幼少期の保育・教育環境が子どもに与える影響の大きさも想定していることが考えられる。次に、障害のある子どもにとっての意味として回答のあった内容と、障害のない子どもにとっての意味として回答のあった内容をみると、障害のない子どもが障害のある子どもとかかわる意味のほうが、子どもにとって良い影響として具体的に語られていた。例えば、相手を思いやる気持ちの育み、障害のある子どもへの理解、幼少期からともに過ごすことによる障害児者に対する差別偏見の軽減である。本研究の対象者からみる現在の保育・教育現場は、障害のない子どもが多数をしめ、障害のある子どもが少なからずいるような環境を想定しているのではなからうか。インクルーシブ保育へと進むことで、保育・教育現場も共生の場になっていくことを考えると、保育者養成課程において障害のある子どもと障害のない子どもの共生の意味とその実現に向けた保育者の役割について学ぶことが必要になるのではなからうか。

上記の問に対して、保育所や幼稚園で障害のある子どもを受け入れる場合の意味合いに関する考えが1, 2年次と3年次で変わっていない学生と変わった学生がいる。具体的内容を述べていない学生が多いため、詳細な分析は次の研究に譲ることにするが、学生CとDの回答を見ると、学生Cは「授業の中で、統合保育についてちょっと触れた機会があった。その時に、障害のない子どもが障害のある子どもとかかわった時に、相手の気持ちになって考える機会が増えると感じた」、学生Dは「実際に見たことはないが、授業のなかの事例を読んだり、ビデオ視聴する中で、障害のある子どもが、障害のない子どもと一緒に過ごしているところを見て、一緒に外遊びをしたりプールに入ったり、・・・(省略)」と述べており、保育者養成カリキュラムが学生の考えに影響を及ぼしている可能性を窺わせる。保育者養成カリキュラムからの影響の内容等については、今後の検討課題としておきたい。

(2) 障害のある子どもの保育についての考えとその変化

今回の障害のある子どもの保育についての考え方の質問回答に対して、筆者らが2014年に行った障害のある子どもの保育に対する考えのコード化(表1)を基に分析した結果を下表4に示す。

表4. 障害のある子どもの保育についての考え方

学生	自由回答に対するコード化(表1参照)
A	環境-2-2 保育上の留意点-1-2(*)
B	環境-2-2 保育上の留意点-1-2(*)
C	環境-2-2 保育上の留意点-1-1
D	保育上の留意点-1-1
E	保育上の留意点-1-1
F	環境-1-1
G	保育上の留意点-1-2(*)

表1の結果を基に分析すると、学生A、B、Cの3名は、「環境」と「保育上の留意点」に関する内容、学生D、E、Gの3名は「保育上の留意点」に関する内容、学生Fの1名は「環境」に関する内容を述べていた。ここでは、「保育に対する障害の認識」「差別・偏見」「将来的展望」に該当するものはなかった。

上記の「保育上の留意点」のうち、学生A、B、Gの3名の学生の回答内容をみると、「保育上の留意点」として「子ども同士の関係への支援」が上がっており、鈴木ら(2014)で1年次の回答から抽出した分類項目にはない新たな視点での回答があることが考えられた。

保育者養成課程を経る中で、障害のある子どもへの保育についての考えは変化し、実際に適切な保育環境において障害のある子どもを受け入れることには肯定的な考えであった。

しかし、受け入れ態勢の充実が大切であるなど、受け入れる環境への視点が具体的に述べられるようになってきている。また、障害程度を挙げて、共に過ごす上での難しさを想定するようにもなっている。さらに、学生自身が保育者であった場合、障害のある子どもを受け入れることへの不安も語るようになった。例えば、学生Bは「受け入れる段階で、なるべく受け入れたいと思う。しかし、3年生になっている授業を受けているうちに、受け入れたくても自分達の園とか態勢などがきちんと整っていなければ、受け入れられないと思う。逆に態勢がきちんとできていない中で、受け入れたい気持ちだけで受け入れてしまうと、その子にとっても周りにとっても良くない上、逆に嫌な思いをさせてしまうだろう。こういったことから断ることも大事だと最近思うようになった。難しいが。」と述べ、障害のある子どもの保育に対する考えと、それを実現することとの間の隔たりを述べているようでもある。

これまで検討してきたように、保育者養成カリキュラムが進み、3年生になって保育者としての心構えが徐々に芽生えてきており、障害のある子どもの保育に対する思いや考え方にも変化が生じていた。具体的に自らが保育者になった場合を想定しながら、また保育現場で起こりうることを想定し、イメージしながら障害のある子どもの保育で配慮すべき点そして障害のある子どもの保育のあるべき姿についても描くようになったことが考えられる。

環境に関する回答では、上でも述べたように、実際保育者になった時のことを想定し、鈴木ら(2014)が言う「保育の上での留意点」の視点を持って環境を述べている学生が多く、1名を除く4名の学生が、鈴木らの言う保育・教育の場に関する環境について語っていた。保育・教育の場に関する環境を超え、制度・施策を含む障害のある子どもを取り巻く大きな社会的な環境を視野に入れて障害の有無にかかわらず共に生活しやすい環境について語ったのは1名のみで、3年生の段階でまだ保育・教育の場を超え広い視点に立って障害のある子どもをめぐる環境を意識するまでに至っていないことが推測される。

今後学生たちが保育・教育現場に入って地域のすべての子どもを対象に一人ひとり異なるニーズに応じた保育を展開するためにはこうした視点が欠かせないが、保育養成課程の段階で学生がどのように学ぶか更に検証しながら対応を進めていく必要がある。

5. 終わりに

本研究では、保育者を目指す学生の「障害のある子どもの保育についての考え方」を把握することができた。今後さらに、免許・資格に関する実習と専門科目の学びをすべて終えた段階の学生の意識を調査し、保育者養成課程の学生の学びの全体像を把握することが課題として残されている。

謝辞

本調査に協力して下さった回答者の皆様に厚く御礼申し上げます。

付記

本研究は、十文字学園女子大学プロジェクト研究経費補助金平成26年度助成を受けた。

引用文献

- ・文部科学省 2012 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための 特別支援教育の推進（報告）平成24年7月23日，初等中等教育分科会。
- ・厚生労働省 2014 今後の障害児支援の在り方について（報告書）～「発達支援」が必要な子どもの支援はどうあるべきか～，平成26年7月16日，障害児支援の在り方に関する検討会。
- ・鈴木晴子・権明愛・潮谷恵美・山田陽子 2013 保育者をめざす学生の障害観に関する研究—障害のある子どもとの出会いに関する調査から—，十文字学園女子大学人間生活学部紀要，11，127-133.
- ・鈴木晴子・権明愛・潮谷恵美・山田陽子 2014 保育者をめざす学生の障害観に関する研究（2）—障害のある子どもとの出会い経験の実態把握—，十文字学園女子大学人間生活学部紀要，12，217-226.
- ・鈴木晴子・権明愛・潮谷恵美・山田陽子 2015 保育者をめざす学生の障害観に関する研究（3）—障害のある子どもにとってふさわしい保育・教育形態に関する考えとその変化—，日本特別支援教育学会第53回研究大会ポスター研究発表。

参考文献

- ・広瀬由紀・太田俊己 2014 インクルーシブ保育における子どもの「参加」—国際生活機能分類（ICF）を活用し保育実践を考える—，植草学園大学研究紀要，6，47-57.
- ・山本佳代子 2006 インクルーシブ保育実践における保育者の専門性に関する一考察—専門的知識と技術の観点から—，山口県立大学社会福祉学部紀要，12，53-60.
- ・藤井和枝 2000 知的障害のある子ども・者に対する女子短大生の意識の変化（1）—ボランティア活動と施設実習を経過して—，埼玉純真女子短期大学研究紀要，16，9-26.
- ・倉本義則 2009 障害者施設実習に対する不安—不安の因子構造および不安と経験との関係—，京都女子大学発達教育学部紀要，5，21-30.